

〈特別寄稿〉

創立二十五周年に寄せて

会長 峰 島 旭 雄

中村元博士（初代会長、現名誉会長）によって創始された比較思想学会は一九九八年に、創立二十五周年を迎えた。一つの学会が四半世紀の歩みを続け、しかも二十世紀という、諸般の面ではなはだ困難な時代を切り抜けてきたことは、注目すべき事柄である。

さらに、学問の世界には、少なくとも百年を経た、西欧では特に十九世紀末からの学問体系がかなりがっしりとした構築をすませており、明治以降西欧の学問を移植し、ドイツ流であれアングロ・アメリカ的であれ、その学問体系をほぼ踏襲しているわが国においては、そこへ新しい学問分野を踏み込ませることは、至難の業ともいえるのである。

比較思想（学）は、このような学問状況の中で、西欧では一九三三年のマンソン＝ウルセルの『比較哲学』（Masson = Ourseil, La

philosophie comparee）の刊行をもって実質的に始まったとみられ、わが国では中村元博士の『比較思想論』（岩波全書、一九六〇年）によって、先駆的業績は別として、実質的に始まったといつてよいであろう。

比較思想（学）は、右に述べたような成立状況からして、既成の学問体系のセクシヨナリズムの打破という学術機能をもつ。たとえば一つの研究テーマを宗教・哲学・倫理で分科（分化）してバラバラに研究するのではなく、東西思想にわたり、かつそのような分科（分化）にこだわらずに取り扱うのである。したがって近來さかんになっている学際的研究（インターディシプリナリ・スタディ）ないし総合的研究とも関連しあう。現象学のフッサールに発しハイデガーが『現象学の根本問題』で取り上げたような〈破壊〉（Destruction）の役割を比較思想（学）は担っている。

さらにそれは、ただ破壊のみではなく再構築をおこなうものとして、近時しばしば言われる〈脱構築〉(deconstruction)をも先取りするものである。

私どもが比較思想学会の出発に際し、ほぼコンセンサスを得て設定した比較思想(学)の規定、「東西思想を比較し、その類似性と相違性を吟味し、自己自身の思想形成に資する」といった表現については、二五年の研究の歩みを経て、いまや総合的に再検討をしなければならない時機になっていると考えられる。東洋とは何か、西洋とは何か、類似性・相違性の相互関連いかん、自己自身の思想を入れず客観的・実証的に終始するのが学問的であるのか、それともあくまで主体性を保持し、主体性を場として比較を遂行すべきか、等々。二五年の進みゆきの中で提起されたさまざまな問題を踏まえ、さまざまな問題を整理し、「半世紀の比較思想(学)への展望とその実質的・実地的な歩みを始めるべき時が来ているのである。

ここで、さかのぼって、比較思想学会の創設当時を振り返ってみよう。最近会員になった方々、あるいは若い世代の方々は、当時の経緯を知らないかもしれない。本学会がこんなふうにしてつくられていったということを知っていただきたいのである。創設者である中村元博士(現名誉会長)は、東京大学退官の前後に、財団法人「東方研究会」を設立し、仏教学・インド哲学ならびに思想一般の諸講座を、東方学院と称して開講し、これを「寺子

屋」と呼んだ。東大アカデミズムの中で育った博士が、意外にもアンチ・アカデミズム、アンチ・セクシヨナリズムであって、民間の草莽の民を相手とする江戸時代の「寺子屋」的な勉強の場をつくることを念願とされたと聞いている。一九七三年(昭和四八)年一〇月に、東方研究会の中村博士から私にお声がかかったかねて「比較思想」「比較哲学」の必要を唱えておられた金沢の医院経営者で民間の思想家、松尾宝作博士から、「比較哲学と教育」というテーマでシンポジウムを行ってほしいとの要請があったので、シンポジアストの一人として参加するように、このことであった。たしか湯島会館(現在の東京ガーデン・パレス)だったと思うが、一室に参集したのは、六名足らずの小人数で、中村博士、松尾博士、末木剛博東京大教授(当時)、守屋茂龍谷大教授(当時)、吉原瑩寛神戸商船大教授(当時)と峰島であった。その際の討議の内容については定かでないが、戦後教育の頹廃が叫ばれているとき、じっくりと腰を据えて、東西哲学思想の比較、つまり比較哲学によって、基本的な考え、人間観・人生観・世界観などを把握することが前提である、というようなことではなかったかと思う。それはこのシンポジウムの実質的な主催者、松尾宝作博士の意見でもあったと思う。討議のあとの会食で、このシンポジウムを無駄にしないためにも、萌芽的に見られる比較思想の研究はどのように進めたらよいかが、話題となった。末木教授は非常に積極的に、研究会を催してその気運を助長すべし

との意見を述べられた。皆賛成であったが、私から、いつそのこ

と学会をつくってはどうかという提案をさせていただいた。一挙に学会？ という意見もあったが、そのことを含めて、とにかく、

もう少しメンバーをふやして一度相談しようということになり、

中村博士、末木教授、峰島の連名で、そのような会合への呼びかけをおこない、同じ年の一月に入って、本郷の学士会館で会合をもった。(松尾「金沢」・守屋「京都」・吉原「神戸」の三名の方々はすでに東京を離れ帰られた) この会合には、三枝充恵国学院大教授(当時)、梶芳光運大正大西洋哲学主任教授(当時、故人)、白木淑夫大正大教授(当時、故人)、田丸徳善立教大教授(当時、また大正大学講師)、峰島早稲田大教授(当時、また大正

大学講師)などが出席したかと思う。結局、学会をつくらうという話になり、メンバーが揃っている大正大西洋哲学研究室に事務局を置くことになり、新年の(一九七四「昭和四九」)一月一日付で「比較思想学会」設立発起人を揃え、趣意書を発表し(その起草には峰島があたった)文書ないしマス・メディアによって全国にアピールしようということに決まった。はたしてどの程度、

また人数にしてどれくらい賛同を得られるか、あやぶんでいたのが事実であったが、結果は、その年、一九七四(昭和四九)年六月の創立第一回大会までに、予想外の反響で、全国から五〇〇余名の参加者を得たのであった。(現在会員約一二〇〇名)このことは、比較思想学会の設立が学問的にも思想的にも時宜を得た

ものであったことを示している。

次に、設立当初の「趣意書」(ならびに発起人)を掲げる。

「比較思想学会」趣意書

最近、学問の諸分野において、一つの専門領域に固定することなく、たがいに協力して共通の問題に取組み、研究の展開と問題の解決に努める、いわゆる学際的傾向が顕著であることは、あらためて指摘するまでもない。また、われわれがとりわけ明治以後急速に摂取し不可欠の学問的支柱としてきたヨーロッパの諸学問ならびにその思考方法がヨーロッパ自体においても問いただされ、大きな転換点に立っていることも、すでに周知の事実となっている。

このような状況において、われわれ学問の研究に従事し真理の追求にたずさわっている者は、ひろく視野を拡大して、手をたずさえて大胆に研究を推進するとともに、謙虚に自己自身の立っている思想的地盤について反省する必要性に迫られているといえる。

ところで、比較思想という研究領域は、このような意味において、現代において無視することのできない重要な意義を有する。それは既成の学問分野に固定することなく、ひろく自由に研究課題を設定し、諸種の方法を駆使して、とりわけ東西両思想の比較考察をおこない、他を顧みることに自己自身の真の把握に志すものであるということができるからである。比較思想の世界思想的意義は現代においてまことに大なるものがある。

わが国において比較思想——比較哲学・比較文化・比較文学等々——にたいして関心を有し、そのような研究に志す研究者の数は次第に増加し、すでに着実な成果も公にされている。しかしながら、従来は、ややもすれば各々相互の連絡もなく、散発的に研究をおこなって

いるのが実状であったことは、否定できない事実である。現代における比較思想の有する意義と必要性にかんがみ、われわれは各研究者が相互の連繫を緊密にたもち、たがいに意見を交換する共通の広場をもつことが緊要であることを痛感する。

このような理解のもとに、われわれはここに、比較思想学会を設立し、同学の士の参加をもとめ、ともに手をたずさえて研究をすすめ、真理の追求にむかっていくことを提唱したい。ここに披瀝したわれわれのささやかな、しかし意義深い主張にたいして、好意ある理解をよせられ、多くの方々が本会に協力と支援をあたえられんことを、切に望む次第である。

昭和四九年一月一日

比較思想学会設立発起人一同

発起人

荒木見悟、安藤正瑛、飯島宗享、伊東俊太郎、今道友信、上山春平、臼木淑夫、梅原猛、大浜皓、梶芳光運、川田熊太郎、雲井昭善、三枝充恵、斎藤忍随、相良亨、末木剛博、武内義範、玉城康四郎、田丸徳善、土居真俊、戸頃重基、中村元、橋本芳契、平下欣一、福井康順、福永光司、松尾宝作、松浪信三郎、峰島旭雄、三渡幸雄、守屋茂、泰本融、山崎正一、山本新、湯浅泰雄、吉原登寛

くりかえし述べるが、本学会は昨年（一九九八〔平成一〇〕年）、創立二十五周年を迎えた。数年前から記念事業を企画し、学会誌総目次・学会三十五年史の編集、国際交流（一昨年早稲田大学で催された国際比較思想会議はその一例）、財政的に可能で

あれば記念論集の刊行などを企画している。日本学術会議人文科学・哲学部門では、印度学仏教学会、中国哲学・道教学会、日本哲学会に次いで第四位にある。ちなみに創設以来の会長は、第一代・中村元東京大学名誉教授、第二代・玉城康四郎東京大学名誉教授、第三代・峰島旭雄早稲田大学教授（当時）、第四代・田丸徳善東京大学名誉教授、第五代・小山宙丸早稲田大学総長（当時）、第六代・峰島旭雄早稲田大学名誉教授（再、現行）。

ここで学会創設以来、今日まで、たえず問題となっている二、三の点を指摘しておきたい。まず、さきにも触れたが、東西思想の比較をおこなうのが学会の本筋とされているが、東洋と西洋の区別は必ずしも定かでないということである。それは、このような区別を、地理的・歴史的・文化的・思想的、なかでも宗教的に、そのようになしうるかという問題でもある。関連して、東洋と西洋の区別を立てたとして、そうでない場合の比較は比較にならないかということも問題である。たとえば、日本と中国では同じ東洋であるということや、インドならインドの中での、仏教とヒンドゥー教の比較は、語の厳密な意味では比較にならないか、など。つぎには、プラトンと仏陀、デカルトと荀子など、時空を超え、比較する者の一種のアト・ランダムな選択による比較は比較といえないのではないかということ、等々である。これらの諸点は、学会創設当初から、批判という形で、内部からも外部からも提起されているところである。

東洋と西洋の区別については、学問常識的にこれを行うしか現在やり方がないのではなからうか。(その学問常識的にも問題がある) かつて来日し本学会で特別講演をいただいたインドのパンデーヤ博士は、仏教とインド哲学とを比較し、この両者の相違は、仏教と西洋哲学との相違以上であるととし、このような比較も(同一文化圏内であるが)可能であるとされた。比較は、実証的に、歴史的に、厳密になされるべきであるが、それとともに、このような比較もまた顧慮されなければならないのではなからうか。問題はいかに厳密に、かつ総合的・包括的になされるべきか、ということにかかっているのではあるまいか。

具体的には、実証的・客観的と主體的との関係、比較思想(学)の展開と関連する学問領域、比較文化(学)・比較文明(学)等とのかかわり、そして基本的には「思想・文化・文明と何か」というような学問論の提唱が必要である。遠心的に比較思想(学)が拡充するとともに、求心的につねに基礎づけ(Begründung)が不可欠である。後者なしには前者は根無し草となろう。

今期で会長職を退くにあたり、たずさわってきたこれまでの学会の歩みの一種の「自分史」を記し、将来へ向けて、二十一世紀へ向けて、比較思想(学)について若干の提言を試みた。

(みねしま・ひでお、比較哲学・宗教哲学、

文京女子大学教授)